

【2024年度第2回研究会特別講演会報告】

## 白老地域に伝わるルウンペの伝承とその変遷について

八幡 巴絵

### 1. はじめに

ルウンペは、アイヌ民族の伝統的な衣服で、木綿の古裂（ふるぎれ）をつなぎ合わせて、その上に、絹、サラサ、メリンスや木綿などの色物の古裂を細く切り、これを切伏している、きわめて手の込んだ衣服である（児島 2018 : 88）。先行研究では、白老地域で製作されたルウンペは、背中身頃の上下が分離し、全体的に細長いテープ状の布を直線的に縫い付けた模様と幅広の布を矩形または正方形に切り抜き縫いつけた模様で構成されることが指摘されている（児玉 1968 ; 岡田 1995）。これが「白老地域の伝統的な衣服の特色」として認識され現在までに至っている。このような先行研究で、明治以降から現在までのアイヌの衣服文化について通時的にまとめられたものは少なく、衣服製作の指導体系の全容は明らかになっていない。そこで筆者は、白老地域に伝承される「ルウンペ」について、国立アイヌ民族博物館の収蔵資料を中心に、関係者らへ聞き取り調査を行い、ルウンペの白老地域の特徴や継承活動、そして衣服の変遷について考察を加えた（八幡 2023）。

本発表は、『国立アイヌ民族博物館研究紀要第2号』に同タイトルで掲載された論文に、2024年4月以降に聞き取りした内容を追加したものとなる。

### 2. 明治期から1963年頃まで：白老コタン時代

明治以降、白老では市街地に住居空間と観光空間が密接となった集落「白老コタン」があった。ここでは各家系で女性たちの手によって木綿を材料としたルウンペが製作され受け継がれてきた。白老コタンでは、各家庭から持ち寄ったルウンペを着用し、観光客に対しアイヌ文化の紹介を行った。この時期に製作されたルウンペのアイヌ模様は、腰のあたりで模様が分離している。全体に施されるアイヌ模様は、直線的な模様が多用されているものや背中と裾に赤い布で切り抜いた模様が施されているもの、そして日高地方の影響を受けた上で、全体的に切伏が施されているものの要素を保持しているものに分けることができる。この時期製作されたルウンペは「家系で受け継ぐもの」として製作された。

### 3. 1963年頃から1984年頃まで：白老民俗資料館時代

白老コタンの観光機能は、1963年頃から移転を開始し、1965年には町内のポロト湖畔に移設し営業を開始した（通称ポロトコタン）。その後、敷地内に開館した白老民俗資料館の展示やポロトコタン内の舞踊公演時に着用する衣装が、和裁と洋裁を習得した職員が中心となり製作された。この衣服の形態は衿がついた袷の和服に変化し、施されるアイヌ模様は簡素化され、刺繍は職員が分担し行った。さらに衣服を大量製作するためにミシンが活用された。1970年以降、ポロトコタンで舞踊を担当する職員は、白老民族芸能保存会（以下、保存会）の会員でもあった。1984年1月、アイヌ古式舞踊が国の重要無形民俗文化財に指定され、保存会が保持団体となったことを契機に、資料館を起点とした文化伝承活動が白老町内に広がった。

#### 4. 1984年頃から現在まで：アイヌ民族博物館以降

収蔵資料の増加に伴い、資料館に隣接し新館が建設され、アイヌ民族博物館（以下、旧アイヌ博）が1984年に開館した。この年以降、白老という地域性を表現して一体感を演出するために、化学繊維製の画一的なルウンペがユニフォームとして製作された。1998年以降は白老地域の伝統的な衣服と舞踊を観客に紹介するため、木綿製のルウンペの製作や着用が推奨された。このとき製作されたものは、白老地域で製作または収集され、国内の資料館や博物館で収蔵されているルウンペを参考とした。2008年以降、旧アイヌ博では伝統的な衣服の複製事業や、伝承活動事業のなかで、人材育成の観点で製作者の中に芽生えていった。それに研究者や学芸員が参画し事業が実施された。この事業の参加者は、町内の刺繍サークルをそれぞれ立ち上げ、主宰や指導者として活動した。この結果、白老地域のルウンペの製作や着用がアイヌ民族にとどまらず、白老地域内外へと広がり、「白老地域のルウンペ」として製作が続けられた。

#### 5. まとめ

白老地域におけるルウンペが「家系で受け継ぐもの」から「地域で受け継ぐもの」と変化した要因は、人の移動やモノの移動を受け、地域間の影響を取り入れ物質文化として変容し伝わったことと、1965年以降、資料館や旧アイヌ博が果たしてきた役割が製作者たちへ影響したことが挙げられる。ルウンペは、博物館収蔵品、展示備品、伝承公開事業におけるユニフォームなど、目的に応じて衣服が製作され公開されたことにより、資料情報や製作技術が白老地域の衣服製作者たちへ波及した。この一連の流れが白老地域のルウンペの変遷であると考えられる。

私は2022年春のテーマ展示「白老地域の衣服文化」展と、その成果をまとめた論文を通じ、「白老地域に伝わるルウンペ」に対する諸先輩たちの、それぞれの知識や技術、そして想いに触れることができた。これは民族、年代、性別関係なく「地域で守るべきもの」として、先輩たちがこの白老地域で伝承活動を行い、今日に至ったおかげである。

#### 引用文献

岡田路明

1995 「アイヌの着物の地方的特色をさぐって―胆振西部地域製作の着物の所在調査―」『アイヌ文化第19号』財団法人アイヌ無形文化伝承保存会、札幌。

児島恭子（監修）

2018 『増補・改訂 アイヌ文化の基礎知識』一般財団法人アイヌ民族博物館、白老。

児玉作左衛門

1968 「アイヌ服飾の調査」北海道教育委員会（編）『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会、札幌。

八幡巴絵

2023 「白老地域に伝わるルウンペの伝承とその変遷について」『国立アイヌ民族博物館研究紀要第2号』国立アイヌ民族博物館、白老。

（やはた・ともえ／国立アイヌ民族博物館）